

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 主婦と職業婦人のあいだ：両大戦間期中国における都市中間層の形成   |
| Sub Title        | Between housewives and career women : the foemation of the urban middle class in China between the two World Wars   |
| Author           | 岩間, 一弘(Iwama, Kazuhiro)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 2006  |
| Jtitle           | 史学 (The historical science). Vol.74, No.3 (2006. 1) ,p.61(277)- 101(317)  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 論文  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060100-0061">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060100-0061</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 主婦と職業婦人のあいだ

## ——両大戦間期中国における都市中間層の形成——

岩間一弘

はじめに

近・現代を生きた女性たちはいつも「二つの出世の道」の間で揺れてきたといえる。<sup>(1)</sup> 主婦（「家庭婦女」「家庭主婦」）になつて家庭内で幸福を得ることは、職業婦人（「職業婦女」）になつて労働市場で評価されることとともに、近・現代女性が目指した経歴であった。

本稿は中国において女性の「二つの出世の道」がどのように出現したのかを検証したい。従来の中国史研究において主婦と職業婦人は、知識人・革命家の女性や女性労働者と比べると充分な関心を集めておらず、依然として明らかにされるべき課題が少なくない。<sup>(3)</sup> 本稿は第一に、両大戦間期の中国都市における女性の階層感覚を見てみたい。すなわち、当時の都市女性にとつて「中」という階層感覚はどのようなものであったか、どのような女性

中国でひろく認識されるようになつたのは、日本よりも少し遅れて、第一次世界大戦後の一九二〇年代に入つてからのことである。その頃、上海などの大都市では企業や機関に勤務して頭脳・精神労働に従事する俸給生活者（「職員」）<sup>(2)</sup> とその家族からなる「新中間層」が勃興しつつあった。当時の新たな社会階層の形成は女性の人生設

たちが「中」と認識し、また認識されたのかを考察する。結論的にいえば、両大戦間期の中国都市において、多数の主婦とごく少数の職業婦人が中間層として新たに位置づけられるようになったことを明らかにする。

そして第二に、女性雑誌の記事から主婦や職業婦人が地域社会や職場でどのように見られたのかを考察する。主婦と職業婦人はともに、勤儉さと優雅さという対照的な二つのイメージをもたれていた。また第三に、都市中間層の女性たちが、どのように就職や結婚を決めたのかを見ていく。就職した女性のなかには、家族の生計を維持するために働く者、社会進出や奉仕精神を自覚する者などがいたが、結婚までの一時的な退屈しのぎの気持ちで働く者もいた。他方、結婚するにしても、非婚女性への偏見、女性が実業に従事することへの抵抗感、女性の就職・昇進機会が限られていたことなどから、やむをえず結婚を決める場合もあつた。

本稿は以上の三つの観点から、両大戦間期の中国において、女性たちがどのように主婦や職業婦人になつていったのか、そして都市中間層がどのように形成されたのかを具体的に明らかにしていきたい。

## 一 都市女性の階層感覚 (1) 中間層女性論の成立

民国初年に「上海婦女生活の調査」と題して雑誌『婦女時報』に発表された記事は、上海の女性の生活状況を「境遇の貧富」によつて「上等社会」「中等社会」「下等社会」の三つに区分した。<sup>(4)</sup> その記事は、まず「上等社会」の女性として、「太太」（奥さま）、「奶奶」（大奥さま）、「小姐」（お嬢さま）、「姨娘」（父の妾）を挙げ、「右に並べたのはおよそ富裕な官吏、偉大な紳士、金持ちの商人、大商人の家の者である。日ごろから色彩豊かな服を着て飽食をし、華やかな家屋に住んで外出するときは軒のついた豪華な車に乗り、贅沢そのものである。しかし、口紅や白粉を塗りたくり、纏足のかよわい足に小さな靴を履き、その体は不自由であり、また普通の生理や衛生に関する知識がない。」とする。次に「中等社会」の女性としては、「家事をきりもりする妻や女子一子女を養う、炊事・洗濯を自ら行う、針仕事を兼業する」、「開店娘娘」（店を開く年長婦人）、「清節堂の寡婦」を挙げ、「おおむねの家事をきりもりする妻や女子

のうち、愚鈍な者はただ炊事・洗濯をして子女を育てるだけだが、有能な者は針仕事をかけもつて生活を助ける。その労苦はほとんど下男に近く、尋常な男子が耐えられるところではない」、「いわゆる店を開く年長の女性はほとんど、いわば夫婦の店を開き、小さな元手で営業する者たちである。勤勉で素朴な者の仕事は上述した所と異ならず、しかも男子は全ての「店の：岩間補注」業務を女性にも託し、女性を有力な店員と見なす。またぶらぶらしている者は、勤儉を旨として家事をきりもりする労苦に耐える準備をしている。」などとした。さらに「下等社会」の女性として、家事使用人（「傭婦」）、街頭で針仕事をする女性（「縫窮」）、女性の船頭（「船婆」）、漁民の女性（「漁婦」）、茶摘み（「揃茶」）、糸紡ぎ（「調絲」）、行商人（「負販」）、産婆（「穩婆」）、結婚式で花嫁の世話をする女性使用人（「喜娘」）、巫術使い（「師巫」）、占い師（「算命」）、あま（「尼姑」）、娼婦（「妓女」）、女乞食（「丐婦」）を挙げた。そして最後に、「このほかにも新社会の女教習・女学生・女医、できるだけ自立しようとする実業家や女教師が輝かしく現れて成長している」とつけくわえた。

すなわち、民国初年までに上海の女性は、家のなかで

暇をもてます「上等社会」の女性、家のなかで家事ないしは家業の労苦に耐え、ときには内職をして家計を助ける「中等社会」の女性、貧苦に迫られてやむを得ず家の外で働く「下等社会」の女性と、女性教員・女子学生・女性医師・女性実業家など「新社会」の女性に階層区分されるようになつた。こうしたいわば「上・中・下+新しい中」という中国都市女性の階層区分は、両大戦間期を通じて定着していった。例えば、一九二九年に『婦女雑誌』に掲載された記事は、中国の女性を「資産階級の女性」、「中等階級の女性」、「貧苦に労働する女性」に分け、「中等階級の女性」として「一般の商人、教職員、医師、機関事務員などの男子の妻や女子」を挙げた。さらに「この三種の女性は知識のない者が大多数を占める」として、別に「中等階級のインテリ女性」を取り上げ、それを「普通学校卒業の女学生」、「女子職業学校の卒業生」、「真に覚醒した女性」に分けて論じた。<sup>(5)</sup>

したがつて、民国期の都市における中間層（「中等社会」「中等階級」「中産階級」）の女性とは、一般に実業家・専門職ないしは俸給生活者の妻である主婦のことを指し、それに女性教員・職員・店員などの職業婦人がくわわつたといえる。清末から「良妻賢母」の役割を果た

す者として意義づけられるようになった主婦の存在は、民国初期までには「家庭婦女」「家庭主婦」「家主婦」「主婦」などの様々な呼称でひろく認識された。ただし、日本の中産階級の「良妻賢母」主義や欧米の都市中間層の家庭觀が伝播した民国初期の中国都市において、夫が一家を支えるだけの収入を得て、妻が使用人を置かずに家事を自分でこなす核家族が、知識青年の間では一つの理想とされたが、それを実際に受容する条件が整つた世帯はごく一部にすぎなかつた。<sup>(7)</sup>

また、家の外で働く女性の集団が中国都市で見られるようになるのは、一九世紀後半のことである。はやくも一八六一年にはジャーディン・マセソン商会が上海に創設した製糸工場が女性労働者を雇用し始めており、一九世紀末からはミッショニン系の病院が看護師を、ミッショニン系の女学校が女性教員を雇い始めた。商業の分野では、一九〇〇年に香港で創業、一二年に広州、一七年にシンガポールと上海で分店を開業した先施公司が、各都市で最初期に女性店員を雇う先例になつたと考えられる。<sup>(10)</sup>さらに第一次世界大戦期には、中国都市で銀行や大型百貨店などが急増して多くの女性職員・店員を雇つた。そして、五・四新文化運動期には女性を「旧家庭」から

解放することが論じられていたが、一九二〇年代半ば以降には「旧家庭」を「出てから」の問題、すなわち職業上での男女平等が議論の中心になつた。<sup>(11)</sup>また、民国初期において職業婦人（「職業婦女」）とは、工場労働者の女性を含める広義の用法で使われ始めたが、一九三〇年代までは女性労働者（「労働婦女」）と区別して、ホワイトカラーの仕事をする女性だけをさす狭義の用法がより一般的になつた。例えば、一九二九年に上海の世界書局から出版された『社会科学大詞典』の定義はわかりやすい。すなわち、「職業婦女は職業に従事する婦女をさし、家庭婦女とは異なる。しかし習慣上、おもに事務員など俸給生活をする婦女をさす。女工にいたつては、労働婦女と称する」とされた。<sup>(12)</sup>本稿において、以下の職業婦人（「職業婦女」）という用語は、『社会科学大詞典』の意味で用いる。

それではここで、「中」という階層感覺の実例を示すため、一九三五年当時におこなわれた座談会における百貨店の女性店員の発言を紹介しておきたい。彼女によると「私たち女性店員の顧客に対する対応にも難しい点が多い。一般的の金持ちの奥さまやお嬢さまたち（「太太小姐們」）は私たちをとても見下していて、少し

も正視しようとはせず、まるで私たちは人というのにも  
値しない悪いもののようにある。彼女たちの自尊自大で  
高貴を装う様子には本当にやりきれない。「中略」でも  
私がとても好きなのは、私たちと同じような人たち、つ  
まり中等の家の人々で、彼・彼女らはときどき買い物を  
しながらおしゃべりをして、『お疲れさま』とか『たい  
へんご丁寧に』などといつてくれ、そんなとき私は本当にうれしい。<sup>(14)</sup> いう。百貨店の女性店員が、顧客を「太太小姐們（奥さまやお嬢さまたち）」と「中等人家的  
人們（中等の家の人々）」とに分け、後者に親近感を持つて、自分たちと同類の人々であると認識していことがある。

## （2）中国各都市の女性たち

続いて、兩大戦間期の中国都市には、どれくらいの女性たちがどのような生活をしていたのかを見てみたい。曙梅「上海婦女の生活」（『新婦女』第一卷第一号、一九二〇年一月）によると、一九二〇年当時、上海の住民は約一五〇万人で、そのおよそ半数が女性であつた。女性たちの構成は、まず①「まったく何もしないもの」が約二万人あまりで、「彼女らの生活は、食べて、寝て、賭

けて、遊ぶ以外に何もない」という。すなわち一握りの上流階層の女性たちが存在した。そして、②「終日家事をきりもりするもの」が約二五万人で、「この種はおよそ中等家庭のなかの女性」であるとされた。また、③「正当な事業のあるもの」が約三〇万人おり、その多くは労働者（二五〇六万人）で、ほかにも学生（約一万人あまり）、教員（三〇四〇〇人）、医師・看護師（三〇四〇〇人）、編訳者・宣教者（二三〇〇人）、音楽家・書家（一〇〇人）、商人（二千人あまり）、漁業者（五〇〇〇人）、農婦（二万人）、「伶人（女優）」（四五〇〇人）などがいた。さらに、④「不正当な事業をするもの」が約一〇万人おり、娼婦、巫術使い、占い師、詐欺師、乞食が挙げられ、⑤「人に使役されるもの」は四五万人で、乳母（「奶娘」）、婚葬の手伝い（「嬪婦」）、ひげ剃り（「剃面娘」）、髪結い（「梳頭娘」）、口入れ（「薦頭」）などがいたという。これらを整理すると、一九二〇年前後の上海の女性人口の約七五万人のうち、約三分の一（二五万人程度）が家事をする女性、三分の二が工場労働者、残り三分の一がその他の推計できる。一九二〇年の時点では家事をする女性は、商人・実業家・企業主などの「旧中間層」の家族が中心であつたが、ほ

かに企業・機関職員などの「新中間層」の家庭に属する者もいたと考えられる。また、工業がよく発達しさらに多くの工場が女性を雇用した上海では、女性労働者の占める割合が大きかつたのに比べて、管理・会計・事務・販売などの仕事に従事する職業婦人はきわめて少数であったことがわかる。

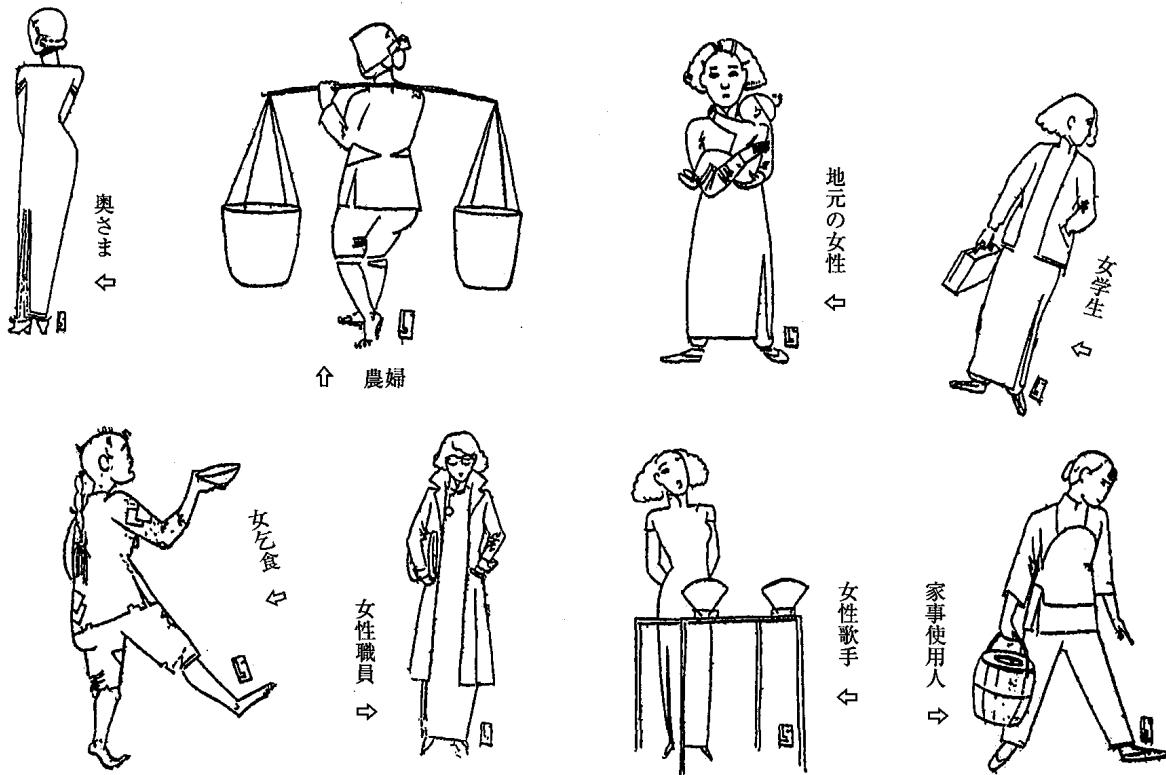
上海以外の中国の各都市においても一九三〇年代までには、都市中間層の女性、すなわち家庭内で家事をする主婦と、家庭の外でホワイトカラーの仕事をする女性が出現していたことを確認できるが、その人数や社会的な影響は都市によつてまちまちであった。例えば、南京では、「農家の女性」、「工家の女性」、「商家の女性」、「女学生」にくわえて、「家庭の女性」と「各機関に服務する女性」<sup>(15)</sup>がいたといふ。また、同じく南京の女性を論じた劉佩文は、①他省からやつてきて軍・政界で働く女性、②軍・政界の夫人や令嬢、③地元の富裕な家の女性、④商店で商売をする女性、⑤工場で労働する女性をとりあげた。<sup>(16)</sup> 一九二七年四月に中華民国の首都となつた南京では、官僚や軍人の妻、政府・軍事機関で働く女性が目立つていた。また華北沿海部に位置し鉄道交通の要所であった青島では、膠州鉄路局や党・政府の各機関の女性職

員が見られ、ほかにも女性教員、女性店員、市電話局の電話交換手などがいたといふ。<sup>(17)</sup> 青島でも工業が発展したが、上海とちがつて女性労働者の姿はあまり見られなかつた。また、中国の首都や数多くの地方都市では、都市中間層のなかでも官僚や軍人などの公務員とその配偶者の占める割合が大きかつたといえる。

それらと比べて、香港の女性には、娼婦や流しの芸人、映画スターやダンサー、物売り、家事使用人、裁縫・洗濯婦のほかに、奥さま・お嬢さま（「太太小姐們」）、女学生、新聞社のタイピストや洋行（外資系企業）の女性職員、先施・永安等の大型百貨店の女性店員などがいた。<sup>(18)</sup> 清末民国期の香港は貿易港として商業が発達していたので、企業職員や商店店員となつた女性が早くから数多く存在したが、工業も同時に発展した上海とは異なつて、女性労働者があまり見られなかつた。ほかにも、杭州では商店・レストラン・理髪店で働く女性がおり、また厦门では家で手工芸をする多くの女性のほかに、教員、医師、看護師、銀行員、海關職員、記者、電話交換手、司書、撮影師、劇場・レストラン・商店・理髪店などで働く女性が見られた。<sup>(19)</sup> ただし、各都市において職のある女性はごく少数に限られ、例えば広州では、「一九二八年

【図1】 様々な都市女性（天津、1935年）

出典：高劉生「点綴新都的女人」、『方舟月刊』第13期、1935年6月。



の調査によると、全市の人口は合わせて八一万一七五一人である。しかし職業のある女性はわずかに五万五四二人で、人口総数の千分の一六四・一二を占める。全市の女性の総数を見ると三三万七六九〇人で、職業のない女性は「女性の」総数の千分の七九二・三〇という大きな数を占める<sup>(2)</sup>と推計された。

ここで紹介すべきは、華北の経済センターであった天津の家庭雑誌『方舟月刊』が掲載した「新都を彩る女性」と題するイラストである（図1）。イラストには家事使用人（「娘娘」）、女性歌手（「歌女」）、農婦、女こじき（「丐女」）といった下層の女性のほかに、女学生、女性職員（「花瓶」）、奥さま（「太太」）、地元の婦人（「土著婦女」）という四種類の中・上層の女性の図像が描かれた。都市の多様な女性たちの特徴をうまく捉えているものといえようが、なかでも女学生と女性職員が上品なイメージで描かれ、また主婦は上品な奥さまと生活感のある地元の女性が対照的に描き分けられている点が興味深い。

## 二 主婦と職業婦人

### （1）主婦像の変化

それでは、民国期都市において主婦がどのようなイメージで捉えられていたのかを見ていただきたい。次の文章は、一九一五年に高君隱という知識人女性が、「中等社会」、「中流家庭」の女性に対する家計の管理方法を説いたものである。「私は実家にいた時、本を読み裁縫や刺繡といった女性の仕事（「女紅」）をする以外には、母を助けて弟・妹の世話をしていただけで、家計のことは何もわからなかつた。嫁に行つた当初は、家計を管理してもすべて茫然としていた。夫の月給のうち家で使う金額が決まつていたが、私はうまく処理できずいつも不足に苦しんだ。一、二年後、少しずつ経験が豊かになつて、省ける費用を節約し、一日に用いる標準を定めたので、不足に苦しまないどころか、いつも余りが出るようになつた。実行した方法は、ただ注意と忍耐だけである。〔中略〕もし注意と忍耐を実行しても家計を維持するのに足りなかつたら、労力でそれを補助する必要がある。教育を受けた者は教員や保母となり、そうでない者は裁縫や刺繡

などの女性の仕事をして家計を助けるとよい」。高君隱の家庭は俸給生活者の夫と主婦の妻があり、民国初期にはまだ少数であつたとしても、新中間層の家庭が出現していましたことを確認できる。また、夫の月給を収入源として、それを節約しながら支出して家計を維持し、必要があれば教員・保母や内職をして家計を補助してもよいとしており、俸給生活者に嫁いだ中間層女性の金銭・生活感覚を読み取れる。高君隱は続けて、「婦徳の墮落は今日の上海に至つて極まり、その原因は大まかにいつて贅沢と放縱にほかならない。いま事態を挽回して将来に患いを残さないようにするには、勤儉であるべきである。ましてや中流家庭には消耗できる巨額の資金がなく、もし時の世俗の真似をして注意や忍耐をおこたつたら、家計を危うくするばかりではなく家風も必ず堕落する。主婦は一家の棟梁であり、家計の貧富、家風の善悪はすべて主婦がつかさどる。私は主婦が勤儉のために尽力して家計を管理することを願い、いたずらに貧しさを嘆いて富を願うことがないことを欲する」という。高君隱は主婦生活にきわめて肯定的であり、「主婦」として「婦徳」を貫くこと、すなわち儉約を心掛けて家計を維持し、家族に質素な生活をさせて家風を守ることを、都市中間

層の女性たちに推奨した。

高君隱が論じた勤儉な主婦は、民国期における一つの典型的な都市中間層の女性像であった。例えば、五・四新文化運動期の代表的な知識人の一人である劉半農（一八九一？—一九三四年）は、妻の蕙英と閑談して次のよう語ったという。「君たち中等家庭の女性についていえば、衣食の心配をする必要がなく、月に三〇～五〇元から一〇〇～二〇〇元の収入があるので、それを見計らいながら使つても「生活は」苦しくない。しかし君たちは人類であり、人類のあるべき身分を基準にして君たちを審査すると、たいへんに苦しいといえる。第一に君たちが未婚の時、父母は君たちに何も勉強を教えず、一〇歳になると君たちのために急に縁談をとりまとめようとする。「中略」第一に君たちは嫁入りした後、自らに知識がないので才のないことを徳とするしかなく、自立でききないから『三従』を重んじるしかなく、男子の歎心を失うとすぐ餓死するから『四徳』『賢慧』〔善良で有徳のこと〕『賢妻良母となること』を重んじるしかない」。

このように、「四徳三従」を守り「賢妻良母」として人生をすごす中間層女性に批判的な劉半農は、主婦の日常生活を次のように描写した。「きみたちは朝の七時に起

床して髪を梳かし、朝ご飯を炊いてから食べ物を買いに行き、子供に食事をさせる。子供が少し大きくなると、服を着替えさせ鞄を準備させて学校に送つて行くが、これだけでもう九時になる。九時以降は、朝食の箸・碗・鍋を洗い、石炭を準備して野菜をつむ。五錢（一錢＝約三・一二五グラム）の間引き菜と一〇錢のぶんどうもやしをつみ取るのもたいてい一時間はかかり、魚を洗つて肉を切り、知らないうちに一一時近くになる。そこで急いで料理をし、一二時になると食事をして顔を洗い、およそ一時間どの服を洗う必要があるかを見て、お湯を泡立てて洗う。人力で服を洗うのには最も時間を費やし、靴下一足で一〇分、短い上着一着で二〇分、三～五着の服を洗えばすぐに夜になつて、たとえ夜にまでならなくとも疲れて少し休む。六時になれば夕飯を準備し、また鍋や碗を洗う。晩には子供の靴下をつくつて衣服を繕い、時間が余つてもせいぜい常用字典をめくりながら、あまり使わない字で小遣い帳に一一二画記して、一〇時以後になるとあくびが早く寝るように催促するのである<sup>(24)</sup>」。

劉半農は、毎日変わらず家事・育児に忙殺される主婦の日常生活を批判的に描き出したが、ここから読みとれるのは、五・四新文化運動期において、家事・育児が主婦

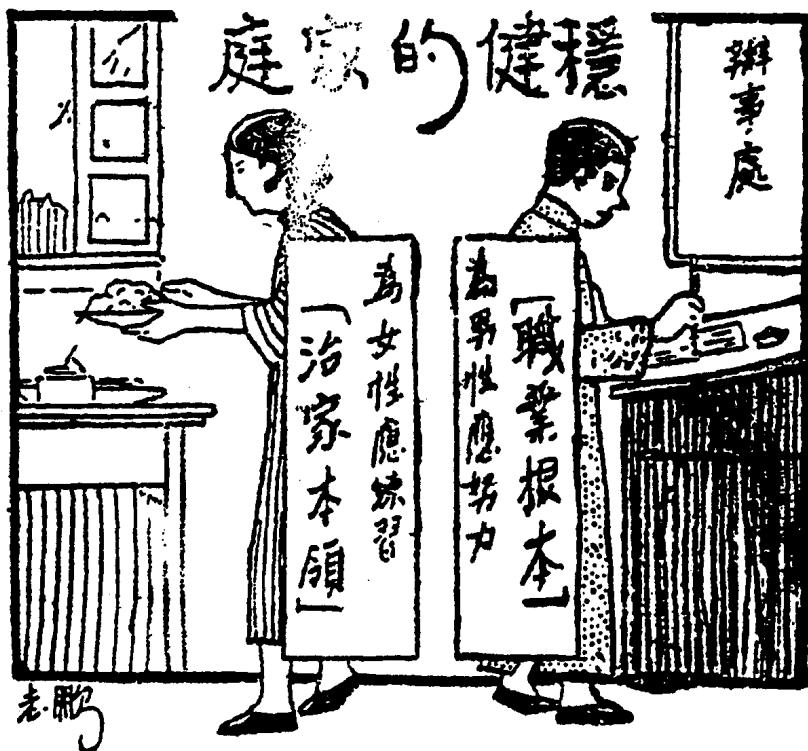
に対して以前にも増して大きな負担を課すようになった様相である。すなわち、当時の啓蒙雑誌などを通じて栄養学・衛生観念や優生思想といった科学的な家政知識が普及し始め、合理的な食・衣・住が求められるようになつた一方で、家事労働を簡便化する器具が普及していくなかつた。とりわけ、劉半農の語る主婦の一日において午後の時間がすべて割り当てられている人力での洗濯は、主婦にとってたいへんな重労働であった。また、五・四新文化運動期には一九一九年五月に訪中した教育学者J・デューリーの影響などもあって、知識人たちの間で新しい家庭教育が模索され始めた。児童本位の家庭教育が推奨された結果、子どもは父母に服従し孝行の義務を負う存在から、教育を受ける権利のある存在に変貌し、父母は子女を扶養する責任をもつ存在に変化した。それに伴つて、授乳から遊びに至るまで、科学的・衛生的な育児法が求められるようになつて<sup>(26)</sup>いた。五・四新文化運動期以降の主婦たちは、一部の使用者（「小丫頭」「老媽子」）を雇える裕福な家庭の者を除いては、家事・育児の高度化と家庭器具の未発達を、より多くの労力と時間を費やすことで補うしかなかつたのである。

#### 五・四新文化運動期に劉半農が描き出した「中等階

級」の主婦の一生と日常生活の批判的な記述は、その後も論壇で繰り返し引用されて、民国期都市の主婦に対するイメージの形成と、女性の家庭外就業や経済的自立を提唱する主張に大きな影響を与えた。<sup>(27)</sup>ただし、妻・母として家事をつかさどり一日中忙しく働きまわる勤儉な主婦像は、都市中間層の女性に対するイメージの一つとして定着するが、一九二〇年代後半から三〇年代になると肯定的に論じられることが多くなつた。例えば、上海の女性を分類した評論は、主婦を「温良な女性」として挙げ、「この種の女性は良好な家庭の主婦で、彼女らは家庭に対して備えが万全で、目上・目下の全ての人に対し正しく、子供を保護し、賢母良妻の主義を実現する。この種の生活は高尚で欠かせないものである」とした。<sup>(28)</sup>また、上海女性の生活を分析した評論は、「家庭の生活」をとりあげて、「中級社会の女性は、家事をして終日あくせくする。〔中略〕事務は繁雑、責任は重大で、男子を仕事に専心させて家庭内の心配事をなくす。こうした賢妻は實に尊敬に値する」とした。夫が職場でのデスクワークに精をだし、勤儉な妻が家事をするといった家庭像は、【図2】のようなイラストによつてもひろめられた。ここで着目すべきは、理想的な家庭像において、勤

【図2】「穩當で健全な家庭」

出典：『女光週刊』第1卷第30期、1930年7月27日、237頁。



儉な主婦の夫として想定されたのは、財産のある商人などではなく、妻と同じく努力家の俸給生活者であったという点である。一九二〇年代後半から主婦が肯定的に論じられることが多くなった背景には、企業・機関職員の夫と主婦の妻やその子女からなる新中間層の核家族が増加してきたこと、そして新中間層の世帯に属する女性の家庭外就業が現実にはかなり困難であつたことが挙げられるよう。

ほかにも、国民党政権が勤儉な主婦を望ましい女性の生き方として推奨したという背景がある。国民党の女性党員であつた呂雲章は、「旧式婦女」の一派として「賢母良妻派」を挙げ、「この一派の女性の衣服は素朴で、見かけも和やかであまり飾らず、一日中生活上の些細な話をし、前の一派「若奥さま・お妾さん」のような気質もない。なかにはかなりの教育を受けて相当な学識があり国家の大事をよく知る者も少なくなく、朝はたいへん早く起き、夜はたいへん遅くに寝る。自らは儉約を心掛け、勤勉で慎み深く家事をして、夫の安全と福利、子供の教育と事業の発展だけを一心に祈願する」と論じた。呂雲章は、「賢母良妻」が「直接生産」に従事しないことを批判しながらも、「男子の家庭内の心配事を取り除

く」ことによつて「間接的に社会を幸福にするところが大きい」ので必要だと評価した。<sup>(30)</sup> また周知のように、林語堂は一九三〇年六月、上海中西女塾での講演で「女子は嫁に行くのが最良」、「女子の最も心に適う職業は結婚である」と発言し、その講演原稿が三三〇三四四年に活字化されて、三四四年二月に蒋介石が新生活運動を発動すると始まつた「婦女回家」論争の火付け役となつたのである<sup>(31)</sup>。

ところで、もう一つ注目すべきは、民国初年までに上流階層の家庭の女性たちが、大奥さま（「奶奶」）、奥さま（「太太」）「闊太太」、若奥さま（「少奶奶」）、お嬢さん（「姨太太」）「姨娘」）、お嬢さま（「小姐」）、令嬢（「名媛」）などと呼ばれて、都市中間層の勤儉な主婦たちと区分して類型化された点である。例えは、彼女たちは「貴族式で職業のない女性」に分類され、「総長・次長・督軍省長の夫人やお嬢さまでなければ、少なくとも科長・司長ないしはほかの何かの局長（総じて長でなければ資格がない）のお嬢さんであり、外出は自動車で、下僕・家事使用人・下女の一群をつれ、ときには車の外に何人かの武装した兵士をくわえ、立派なご馳走を食べ、劇場に行き、映画を見る。彼女らはただ、金を稼げる夫

に嫁いだか金を稼げる父親に頼つて、そのようにできるのだ」などといわれた。<sup>(32)</sup> こうした上流階層の奥さま・お嬢さんたちに、当時のほとんどの論評は批判的であつたが、その理由は、彼女たちの派手な生活ぶりと夫・父への依存性であつた。例えは呂雲章は、「この一派は、短髪・ハイヒール・狭い袖・長い上前のあわせ・雪のような白肌・花のようない美貌と、外見は十二分に新式だが、しかし依存、甘えや怠けが性分になり、人生の意義を知らず、さらに公民の責任もわからない」と評して、「若奥さま・お嬢さん派」を「賢母良妻派」と対比した。

しかし両大戦間期には、一部の政府高官や大実業家のほかにも、かなりの高給をとる俸給生活者層が出現したことによつて、夫の収入だけに頼りながらも家計維持や家事に忙殺されず、使用人をやとつて優雅な余暇生活を享受できる主婦層が拡大した。例えは、一九二七年一月、『婦女雑誌』に掲載された「新時代の主婦」という漫画は、前述のような妻・母として家事をつかさどり一日中忙しく働きまわる勤儉な主婦像とはまったく異なるイメージを提示している。すなわち、「新時代」の「新文化生活」をする「新主婦」は、①外出時には新奇な服装をして、腕を組んで夫にエスコートさせながら街を歩き、

②土曜日の夜には夫にレコードの準備をさせてダンスを習い、③夫にいくらかの生活費を渡し、夫はそれを使い果たしたら煙草も吸えず、④外出・帰宅の時には夫に接吻を求め、夫は壁に息を吐いて口臭がないか確認してから要求に応じ、⑤日曜日には野外で会食をし、夫に食器・調理・コーヒーなど全てを準備させ、⑥就寝時には部屋の鍵を閉め、夫はもし妻の部屋に急用があつても妻を起こせないので窓から入るしかないという（図3）参照。

漫画が「新時代」の「新文化生活」として皮肉をまじえながら滑稽に描いたのは、当時、都市中間層の主婦にまで普及しつつあつた欧米風の生活様式である。こうした新しい生活様式を楽しむ夫婦は、「新家庭」と称することがあつたが<sup>(34)</sup>、民国期の「新家庭」は、「摩登」であるとして人々の憧憬の対象になつたのと同時に、「冒充文明「西洋文明の物まね」<sup>(35)</sup>として批難される、両義的なイメージでとらえられた。とりわけ、「新家庭」の夫は、経済的な基盤だけではなく纖細な思いやりや絶え間ない愛情まで求められたのに対しても、妻は家事もせず夫の収入に依存して娯楽に興じるだけの場合すらあるとして批判された。極端な例をあげると、主婦のなかには、

もう以前のように家事を研修する必要がないさえ考える者がいたといふ。すなわち、「もし布織りを教えようとすると、彼女によれば、今では外国船が雲集しており、インドの絹織物、フランネル、高麗布、ロシアの肩掛けなど、様々な種類が商店街に満ちあふれているので、いくらくお金を使えばはぶける仕事はたいへん多く、苦労して布を織つてどうするのだ」という。もし裁縫を教えようとすると、彼女によれば、衣服をつくるのは仕立屋の仕事で、靴をつくるのは皮職人の仕事だから、どうしてできるものかといふ。もし洗濯を教えようとすると、彼女によれば、昼間は社交して友に会つて麻雀をし、夜はまた遊戯場に行つて劇を見るので、そんな汚らわしい仕事を私たち新女子のすることではないといふ。もし調理を教えようとすると、彼女によれば、学校に進学してからレストランに行つてご馳走を食べ、調理を学んだことはないし、きついワンピースの婦人服（「旗袍」）を着ていると腰を曲げるのに不便で調理などできないといふ。<sup>(37)</sup>こうした新たな主婦像が雑誌等を通して普及すると、上流階層の一部の女性の生活様式や、それに対する向けられた批判の矛先が、都市中間層の主婦にまで拡大された。そして一九三〇年代初頭までには、都市中間層の女

【図3】「新時代の新主婦」

出典：中秋生「漫画 新時代的主婦」、『婦女雑誌』第13卷第1号、1927年1月。



性の「寄生」が問題視され、例えば「過去の性的な寄生生活は少数の統治者階級の女性にだけ見られたが、しかしこの種の危険はすでに大部分の中産階級の女性に蔓延した。将来には人類の全ての女性に広がるだろう」と警告された。<sup>38</sup>

## (2) 職業婦人の登場

ところで、一九世紀までの中国都市においても、商家の女性が家業を助けて働き、貧家の女性が家事使用人（「娘姨」）や芸人・遊女（「妓女」）として働くことがあつた。また、「小販」といわれる街頭の物売りのなかにも女性がいた。しかし、みずから妻や娘が家の外で家事使用人や物売り・遊女となることはもちろん、自営の商店を手伝つて店員となることさえも、夫・父にとつて不名誉なことと感じられていた。<sup>(39)</sup> しかし、一九世紀後半から、工場労働者・看護師・教師などとして家族の外で雇われて働く女性が見られるようになり、民国期に入ると、職業をもつ女性が中国都市の人々にひろく認知されるようになった。とりわけ一九一〇年代後半からは、中等水準以上の教育を受けた女性の数が急増していき、また第一次世界大戦の影響による好況期から中国都市では工場・銀行・大型百貨店等が続々と開設され、さらに五・四新文化運動によつて「旧家庭」からの女性解放が声高に提唱されたこともあり、職員・店員として働く知識人女性が増えていった。そのことは、例えば「わが国〔中国〕の女性の職業は民国からやつと存在する」、

あるいは「中国における職業婦人の興隆は、「一九三九年の時点で」まだ最近の二〇年のことである<sup>(42)</sup>」などといつた、一九四〇年前後における回顧からうかがい知れる。それゆえ、一九一〇年代に成人して三〇年代に四〇歳台をむかえる世代は、女性の職業に関して、年輩者とは異なる経験や考え方をもつことが多かつたようである。例えば、一九三四年の雑誌論説は、「高等の職業に従事する女性で四〇歳を過ぎた者はほとんどいない。「中略」私が思うに、こうした人材の問題は女学校の隆盛が最近二〇年のことに過ぎないから生じるのである<sup>(43)</sup>」と指摘し、また一九四〇年、政府機関に勤務する女性専門職員は「男性の同僚、とりわけ四〇歳以上の男性の同僚はほとんどが女子の就業に反対する」と述べている。

中等水準以上の学校教育を受けた多くの女性がもつともはやく進出したのは銀行業と小売業であった。<sup>(44)</sup> 例えば、中国で最初期に女性店員を雇つたのは先施公司（一九〇〇年に香港で創業、上海に出店は一七年）で、永安公司（一九〇七年に香港で創業し一八年に上海に出店）がつづいたが<sup>(45)</sup>、そのほかにも一九二四年までの比較的はやい時期に、北京では新民儲蓄銀行の婦女儲蓄部、中国女子商業儲蓄銀行、一五一公司、広州では競業商店、遠東商

業儲蓄銀行、広三鉄路局、広州電話局、そして上海では上海商業儲蓄銀行、上海女子商業儲蓄銀行、上海国民商業儲蓄銀行、美豊銀行、微微公司（百貨店）、香亞公司、中德公司、科發藥房、中華書局、中美圖書館、惠羅公司、英明照相館、植權女子商店、永芳（女子商店）などが女性の職員・店員を雇用した。<sup>(47)</sup> ちなみに女子商店とは、女性の経済的な自立を助けるために株主（「股東」）・経営者（「經理」）から職員・労働者にいたるまで女性中心で営業する商店のことである。一九三〇年代初頭までに上海ではほかにも雲裳公司・博美公司・女子書店・愚園商店などが開業していた。

一九三四年一月に公表された上海の女子中学生五〇〇人（初級中学一年生から高級中学二年生までの各学年一〇〇人ずつ）を対象とした就職調査によると、教育の分野で働くことを決めた者（八八人）が最多で、商業の分野（七八人）が続き、具体的には、銀行で働くことを確定した者（三五人）が最多で、中・小学校（一九人）、海關（一三人）で働くことを確定した者が続いた。<sup>(49)</sup> 上海では一九三二年において、初等教育機関の女性教員数が二三二二人で同機関の全教員数の三八・八%を占め、中等教育機関の女性教員数が七〇八人で同機関の全教員数

の一九・二%を占め、高等教育機関の女性教員数は三五年において一九八人で同機関の全教員数の八・七%を占めていた。そして三十年代末の上海では、教員以外にも計四〇〇〇～五〇〇〇人の女性職員・店員が勤務し、商店に六〇〇～七〇〇人、銀行に三〇〇人あまり、海關に九〇人、郵政局に二五人<sup>(51)</sup>、外資系企業に三〇〇人（その多くは電話会社の交換手）、ほかにも看護師や工場の女性職員などがいたと考えられる。<sup>(52)</sup>

また、公務員について見てみると、国民党軍の北伐には多くの女性が関わり、一九二七年四月、南京に国民政府が成立してからも、中央の党部から県・市の各機関まで多くの女性職員がそのまま勤務をしつづけた。一九二四年一月に開催された中国国民党第一回全国代表大会で宣言された政綱の対内政策の第一二項にある「法律上、教育上、社会上、男女平等の原則を確認し、女権の発展を助け進める」という規定が根拠になっていた。しかし、一九二八年に行われた行政機関の改組では、女性職員が最初に人員削減の対象となり、新たに採用された女性は少なく、女性職員数が大幅に減少して、それ以前の半分以下になつた機関もあつた。<sup>(54)</sup> そして一九二九年、南京の中央政府各機関の職員（七四八一人）のうち女性職員は

一〇五人で、全職員のわずか三%弱となっていた。年齢は二〇歳台で、中学か職業学校の卒業者がもつとも多く、大学修業・卒業者がそれに続いた。職務としてはタイプングが最多で、筆記が次に多く、文書保管や新聞の切り抜きがそれに続いた<sup>(55)</sup>。また上海の行政機関では、一九二九年一二月から海關が、三一年一月から郵政總局が、郵政總局とほぼ同時期から實業部商品檢驗局が女性職員を雇用し始めた<sup>(56)</sup>。

このように政府機關による女性職員の採用は南京国民政府の成立当初をピークとして、その後は採用制限や削減の方針がとられるようになるが、学校や病院および民間の銀行・商店が多くの女性を雇用する傾向は一九三〇年代も続いた<sup>(57)</sup>。当時には従業者の個性を説明する際にしばしば性差が強調されたが、雇用者から見て女性の方が男性よりも優れていると考えられた性質として、女性は「些細で小さなことをよく覚えており、同じ動作をしても容易に疲労せず、作業が器用であり」、「心が細やかで、整理する力に富み」、また女性職員は「自尊心が強く」、「よく法規を遵守し」、「心が穏やかで忍耐強い」などの諸点が挙げられた。さらに、工場で女性労働者が好まれたのと同じように、女性職員の方が雇用者に従順で、賃

金が低く、休・停職させやすいなどの利点もあったと考えられる<sup>(58)</sup>。一九三〇年代初頭までに、女性の職場進出が男性に脅威を与えていたことは、『申報』「自由談」の次の論評からうかがい知れる。すなわち、「政府の各部、各科、各会にはみな、女部員、女科員、女書記がいる。

県長閣下や司法官さまはまはづつと男子のなるものであつたが、今では女司法官や女県長もいる。上海を見ても、商店の勘定台や銀行の出納処では、現在およそ二～三割が女職員である。「中略」ある人はよい話だというが、しかし将来に男子の地位がみな女子に奪いとられたらどうするのか？ 友よ、あわてることなけれ、その時には家で飯を炊いて服を洗い子供を抱くのが男子の仕事となる。それにもし何だつたら「その時に」男子の職業を提唱しても手遅れではあるまい<sup>(62)</sup>とさえ論じられた。女性の社会進出に関してやや楽観的すぎる見方といえるが、一九二〇年代以降、職業をもつ女性が急増したことが、こうした過大評価の背景にあつたと考えられる。ただし他方で、雇用者は「顔が綺麗で、交際にたけ、人格を惜しみなく売り出す」ことなどを採用する女性に求められることも少なくなく、また女性従業員は商店では「商売を広める道具」ないしは「活招牌」（生きた看板、【図4】参

【図4】「生きた看板（活招牌）」

出典：汪仲賢撰述・許曉霞絵図『上海俗語図説』、上海社会出版社、1935年、327頁。



照）、機関・企業では「花瓶」（職場の花、後述）として扱われることもある<sup>64</sup>。さらに女性職員の不利な点として、恋愛に精力が費やされる場合、家事の多くが女性の負担とされて仕事に影響が及ぶ場合、出産で職場を離れ戻つてこない場合などがあることが指摘されていた<sup>65</sup>。

しかしながら、兩大戦間期の中国において、ホワイトカラーの職につく都市中間層の女性が増加すると、彼女たちを職業婦人（「職業婦女」）と呼んで一つの社会集団として認知することが多くなつた。確かに、「いわゆる職業婦人とは、すなわち中上層階級のインテリ女性労働者と下層の女性労働者を総じていう」とする定義も存続したが、一九三〇年代には職業婦人（「職業婦女」）と女性労働者（「労働婦女」）を区別する用法の方がより一般的になつた<sup>66</sup>。すでに示した『社会科学大詞典』

の定義以外にも、例えは「いわゆる職業婦人とは、広義には、知力や体力を売り出して生活費を得るすべての女性のことであり、女性労働者も含む。しかし狭義には、いくらかの事務・技術能力を有する被雇用者・営業者で、独立した地位を持つ女子のことをいう。ふつう職業婦人」という場合は後者を指す<sup>(68)</sup>、あるいは「職業婦人」という名詞は、ふつう女性公務員・女性教員・看護師・女医・女性店員および各種機関の女性職員のことをいい、労働者の女性を含まない<sup>(69)</sup>」といった狭義の用法がひろく普及したのである。

そして両大戦間期の上海では、こうした職業婦人の社会的な地位を向上させ、職業生活を支えようとする社会团体が開設された。一九二一年には、邱麗英によつて上海女子職業聯修会が創設され<sup>(70)</sup>、二五年には、婦女職業促進会の開設準備が始められた<sup>(71)</sup>。両団体の活動の詳細は不明であるが、職業婦人の出現から間もない初期の職業婦人団体として注目される。さらに上海のYWCAも女性のために職業紹介や職業指導に取り組み<sup>(72)</sup>、一九二八年には職業婦人のための個別の部門を設置して、三一年に中國職業婦女同志会に改組、翌年には職業婦女交誼会に改称された。また一九三六年にはYMCAと繋がりを持つ

中国職業婦女会が結成され、三八年には中国職業婦女クラブと改称され、三九年に主席の茅麗瑛（一九一〇～三九年、三八年に共産入党）が傀儡政権「中華民国維新政府」の特務に暗殺されるまで活発な活動を展開している<sup>(73)</sup>。

一九三〇年代に入ると世界恐慌の影響が到来し、さらには自然災害による農村経済の破綻に伴つて都市への人口流入が増加して、都市の失業問題が深刻化すると、男性失業者救済のために女性の雇用を抑制する風潮が見られた。ここでは、公務員となつた女性たちが、戦前・戦時期に体験した労働上の制限を見ておきたい。一九三三年には、北平市政府が経費削減を理由に女性職員を全員解雇した。一九三四年二月に蒋介石が新生活運動を発動すると、「婦女回家（女は家に帰れ）」というスローガンが広まり、三五年一一月の国民党第五期全国大会では「体力、知識の両面が健全な母性の育成によって種族衰亡の危機を救い、国家や社会の堅実な基礎を作る」ことが宣言された<sup>(74)</sup>。そして一九三七年七月に日中全面戦争に突入すると、国民政府の各機関は人員削減を行つたが、その際にも女性職員が最初の削減対象になつた<sup>(75)</sup>。例えば、一九三九年九月、昆明の郵政総局が、既婚女性には採用試

験の受験を認めず、未婚の女性職員は結婚を決める解雇するという規定を発して、上海の郵政局で実行しようとしたが、YWCAなどの女性団体の反対運動によつて四〇年二月に撤回させられた。ところがその直後の同年四月、今度は内政部が既婚女性の雇用をきびしく制限する方針を立案した。<sup>(75)</sup> ほかにも、交通部は既婚女性の採用制限を試み<sup>(76)</sup>、湖南省政府は女性職員の削減をしようと

た。<sup>(77)</sup> これらの明らかな制限にくわえて、さらに「無形の制限」が厳然と存在し、例えば、政府機関が会計人員を募集し、規定の上では男女ともに受け入れるとされたが、結果的に女性の採用者がたいへん少ないとあった。<sup>(78)</sup> また戦時期には民間の銀行でも、休業や業務縮小の名目で女性行員を先に停職させることがあつた。<sup>(79)</sup>

ただし、上海の職業婦人は、戦時期においても労働環境の大きな変化を体験することはなかつた。イギリスやアメリカでは徴兵された男性の職務を代行することで戦時に女性の社会進出が進んだが、徴兵のなかつた上海では、戦争によつて性別にもとづく労働配分のパターンが改変されることはなく、女性（とりわけ既婚女性）の雇用はおおむね制限されたままの状態が続いた。数少ない例外としては、戦争の影響で経営難におちいった小学校

が、低賃金ですむ女性教員の雇用を増やした場合があるだけだつた。とはいゝ、戦時におけるインフレの昂進によつて家計が苦しくなつたため、雇用制限が続くなかでも職を求める既婚女性は増加し、未婚女性は婚期を遅らせて職業に従事する期間を延長するようになつた。<sup>(80)</sup>

### 三 就職や結婚を決めるまで

#### （1）職業をもつということ

では続いて、職業婦人が登場したばかりの両大戦間期においては、女性の職業あるいは職業をもつ女性が、職場や地域社会でどのように見られたのか考察したい。当時の中国において、中・上層の家庭に育ち中等水準以上の学校教育をうけた女性たちは、未婚ならばお嬢さま（「小姐」）、既婚ならば奥さま（「太太」）と呼ばれたが、彼女たちのなかにホワイトカラーの職につく者が登場し、一九二〇年代までにはひろく認知された。すなわち、「生活程度が中等以上の家では、女子はけつして職業につこうとなかつた。おおかた自分では下僕を使はず、人に奥さま・お嬢さまとは呼んでもらえない者か、あるいは自分が人を奥さま・お嬢さまと呼ばなければならな

い者だけが、やむなく職業をもつたのである。もし下僕をつかう奥さま・お嬢さまが職業についていたら、人が笑い話にした。これらは以前の情況である。新しい女子はこうではない。学堂が開設されて教員になれば、下僕を使い、人に奥さま・お嬢さまと呼ばれているにも関わらず、にわかに職業をもつことになるのである。「中略」新式の産婆・看護師・女医も、下僕に奥さま・お嬢さまと呼ばれ、しかも彼女らは、以前の産婆のよう人に奥さま・お嬢さまと呼ぶ必要はないので、この種の職業に従事する人がじょじょに多くなつた<sup>(81)</sup>といえた。

とはいへ、当時の中・上層の女性は、依然として就職に抵抗を感じ、とりわけ実業界で働くことに対しても、教育・医療の分野で働くことに比べて強い抵抗感を感じていた。例えば、胡錫瑜という知識人女性は、中学校を卒業後、教員や医師・看護師になることも考えたが、あえて北京の一五一公司という百貨店に就職した。彼女は、「私たちはみな気づくのだが、女子は家の居室に閉じこもり、裁縫や刺繡などの女の仕事（「女紅」）をすべきであると、現在でも一般の人々は考えている。女性教員になるのならばまだよいが、もしも女商人になるのならば、彼らは破天荒なことだと思うだろう<sup>(82)</sup>」と述べている。

さらに、中・上層家庭の女性が職業をもつと、彼女たちの仕事に対する熱意や動機がほかの女性労働者や男性職員と異なる場合があった。例えば、中華書局を経営した陸費逵（一八八六—一九四一年）は、一九一〇年代という早い時期に女性職員を雇つて生じた問題として、「中・上流の女子」の「健康の問題」を挙げた。陸費逵は、「わが国の中・上流の女子はしばしば体が不健康で、多くが病の多いことを愁い、女性職員の休暇は男性職員よりも多く、病気での辞職はさらに男性職員よりも多い」と述べたが、これは健康問題であるのと同時に仕事に対する「熱意の問題」でもあつたといえる。すなわち、陸費逵によれば、企業職員となつた「中・上流の女子」は、しばしば仕事に無理をしようとはせず、あるいは家の者によつて大事をとらされて、簡単に休暇や辞職を願い出たという。その背景には、「現在の社会では、多くの場合、父・兄・夫・子が家計を担い、女性が担うことが多く、差し迫つていないので、熱意や根気は次第に減少する。したがつて家計を担う必要のある女性は、職業に対して比較的熱心で根氣がある。私は冗談をいうのだが、『男子は安定した職業があると妻を娶れるので、世帯をもつために職業にさらに熱心になる。女子は夫が

よいほど職業がいらなくなるので、未婚女子の職業に対する希望は、家をよくすることに比べてはるかに小さい。』』<sup>(83)</sup> という事情があつた。つまり、「中・上流の女子」の多くは、職業婦人となつても家計を担う必要がなかつたので、家族の生計を維持するために働く女性労働者や男性職員と比べて、仕事に対する熱意や動機に欠けることがあつたのである。

それでは、登場してまもない「第一世代」にあたる中國の職業婦人たちが、どのような意識をもつて働いたのかを、さらに見てみたい。両大戦間期の職業婦人は、およそ次の四種類に類型化されて論じられた。第一に挙げられたのは、「自覚のある職業婦人」ないしは「社会への服務を職業とする女性」である。彼女たちは、「大多数が中産階級以上の出身であり、もともと家族の扶養をうけたり、彼女らを養う能力のある金持ちの夫に嫁いだりできるので、自ら生活費をかせぐ必要はない。彼女たちが職業界に身を投じたのは、人の庇護を受けることは一種の人格の喪失で、とても恥ずかしいことだと思うからであり、毅然・決然として家庭の檻を打ち破り、職業界の中に自ら新天地を切りひらき、額に汗して自らのパンを獲得しようとするとある」<sup>(84)</sup> あるいは「彼女た

ちが事業に従事するのは、女性の天性の才能を表現して、『女性の知力・体力は男子に及ばない』などという話が誤りであることを実証し、社会の女性に対する蔑視をとりさるためであり、個人の地位を考えてのことではない<sup>(85)</sup> とされた。これとは対照的に、第二には、無自覚で惰性的だが勤勉に働く職業婦人がとりあげられた。彼女たちは「社交や恋愛といったものは軽はずみであると考え、女性参政・女性解放といったものは高遠な追求だと考え、ただ規則に従つて事務をして期日に俸給を得るだけしか知らない」とされ、「個人主義の職業婦人」と称された。

また第三には、生計維持・家計補助のために働く広義の職業婦人たちが挙げられた。すなわち、「この一派の女性のなかには、精神労働と肉体労働に従事する者、および新式工場の労働者、旧式の家内工業の手工芸者や農民などがふくまれ、職業婦人全体の最大多数を占める。」<sup>(86)</sup> 「中略」彼女たちの仕事の収入では充分に自らの生活費をまかなうことができず、家族の補助に頼るか、あるいは賃金の所得を家計の補助とするしかなく、彼女たち自身は依然として家族によつて扶養されている<sup>(87)</sup> と論じられた。これに分類された女性の多くは工場労働者であり、

彼女たちはしばしば「幸せな家庭を離れ、面倒を見る者のいない子供を置き去りにし、工場に行つて一〇時間以上の無味乾燥な機械生活をしなければならない」ことがあつた。ほかにも、「生活の圧迫のために職業を探しに出てくる女性」<sup>(88)</sup>のなかには、ホステス（「女招待」）や娼婦などになる者がいた。

そして第四の類型として挙げられたのが、「遊戯している職業婦人」<sup>(89)</sup>ないしは「暫時的な職業婦人」であつた。

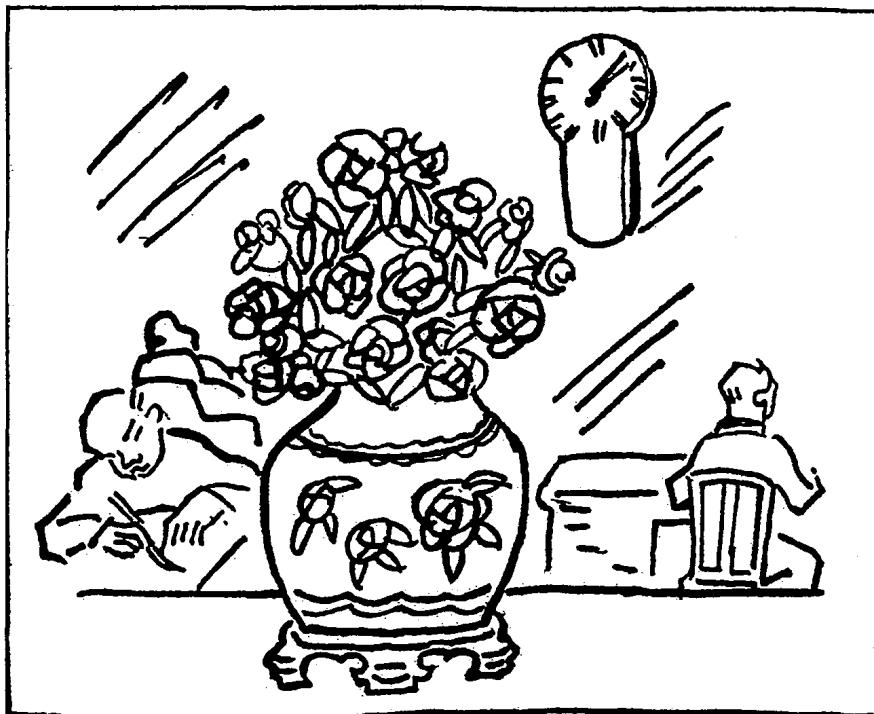
これに類型された職業婦人たちは「家庭生活が平凡で单调すぎるので、職業界にやつて来て、少し空気を入れかえることにした。それゆえ彼女たちが職業を選ぶときは、ただ事務が簡潔であるかどうかだけを重んじ、報酬の多寡を重視しない。彼女たちの収入は自らの化粧品を買うのにも足りないことがあり、いうまでもなく衣・食・住などの日常生活費はすべて家族に頼る。彼女たちが職業に従事するのは、職業婦人の名を博して自ら誇りに思えたり、あるいは「職業界の」にぎわいを少しだけ味わい知れたりするからであり、未婚の女子のなかには「職業に」かこつけて意にかなつた夫を探そうとする者までいる。また、ある職業婦人に聞いたのだが、同僚のなかには、家族が勉強をさせようとしたが望まず、職業をす

ることで家族の勧告を免れた者もいるとのことである。この類の職業婦人の数は、自覚のある職業婦人とほぼ同数である<sup>(90)</sup>という。さらに極端な場合には、「自らの職業の所得は、完全に彼女個人が享受するもので、できるだけ個人の身の上に使おうと考え、毎回の俸給はすべて自分で使うものを買い、それ以外にさらに家族（夫も含まれる）に少しでも多くのお金を求めて不足を補おう<sup>(91)</sup>とする職業婦人さえも存在した。

こうした第四の類型の職業婦人の特徴を揶揄して、「花瓶」（職場の花）<sup>(92)</sup>という呼称が用いられるようになつた。「花瓶」とは、職場できれいに化粧をして人の注意を引くけれども仕事の能力がない女性職員に対する蔑称で、一九二七年に国民政府が南京に建都して女性職員を多く雇用するようになつてからひろく使われ始めたといふ。女性の職業に関する一九三〇年代の論説において、「花瓶」という呼称を批判的ないしは自省的に論評した例は枚挙に遑がない<sup>(93)</sup>。【図5】のイラストもその一例である。それらの論説が指摘するように、職業婦人がしばしば「職場の花」になりがちであったのは、女性自身が職業人としての自覚や職業への熱意を欠くための場合もあつたろうが、それと同時に、管理者が女性に「花瓶」

【図5】「職場の花（花瓶）」

出典：殊君「向街頭的女性」、『女学生雑誌』創刊号、1931年10月。



花 瓶 ！



花 瓶 ？

としての役割しか求めず、優れた能力を發揮する機会を与えたかったための場合も多かつたのであろう。それゆえ当時の「自覚のある職業婦人」ないしは「社会への服務を職業とする女性」たちは、「花瓶」を反面教師にして努力する必要があった。職業婦人の一部は、「遊戯している職業婦人」ないしは「暫時的な職業婦人」に類型化され、「花瓶」と呼ばれないようにするために、仕事の上で威信をうちたてようと努力していた。例えば、八年間公務員として勤務した周氏は、「第一に後ろ盾に頼らない、第二に上司と結託しない、第三に仕事を奪いとり、困難な仕事からも逃げずに男性職員とともにする、第四に飾り立てず、いわれのない接待には応じず、華美な服装を身につけない」ことを心掛けたという。このように、「花瓶」という蔑称が広まるなど、職業婦人たちは男性以上に、職業人としての自覚や職業への情熱を示さなければならぬ場面があつたのである。しかしながら、女性職員に対する不平等な扱いは一九四〇年代も継続し、戦後期には「『花瓶』になることは、『飯桶』『主婦』になることよりも果たして少しましなのか」と揶揄して、職場における女性職員の置かれた境遇のわるさを家庭における主婦に喻えて訴える論説も見られた。<sup>(95)</sup>

ところで、両大戦間期において中等水準以上の学校教育をうけた後に商店・工場・銀行・学校・事務所などで精神・頭脳労働に従事する都市中間層の女性が増えると、彼女たちの身体觀や生活様式に新たな変化が生まれていった。興味深い例を一つ挙げると、清末民国初期まで中・上流階層の女性は「幽嫋貞靜」（しとやかでおとなしく節操があつてもの静か）、「斯文」（文人氣質で優雅）であるように駢けられるのが普通であったが、一九二〇年代には「精神と身体が平均的に発達した健康美をもつた女性」が理想とされるようになつた。くわえて当時、働く女性の健康維持（「衛生」）の問題が注意され始め、職業婦人の発症しやすい症状として、頭痛・目眩・耳鳴り・肩痛、精神の衰弱、脚氣、呼吸器の疾患、月経不順や膿炎<sup>(96)</sup>、あるいは近眼、猫背、手や指の痙攣<sup>(97)</sup>などが挙げられるようになつた。そして、学校の体育の授業で体を動かした女子学生は、卒業後して就職すると運動する時間がなくなるとして、彼女たちの事務労働の疲労をいやすためにジョギング・テニス・自転車・バスケットボール・ボート・水泳などのスポーツが奨励された。<sup>(98)</sup>さらに、一九二四年六月の『婦女雑誌』は、“Health, Strength and Power”（詳細不明）といふ欧文文献から、設備のないと

## 【図6】「職業婦人の運動」(腕と膝の体操)

出典：楊彬如「職業婦女的運動」、『婦女雑誌』第10卷第6号、1924年6月。



ころでも女性が手軽にできる体操を紹介している（図6 参照）。このように女性雑誌において、毎日の仕事で疲弊する職業婦人の健康を守るための体操方法が紹介された背景には、「健康美」をもつた女性が望まれるようになつたことにくわえて、「職業病<sup>(99)</sup>」という観念が普及したことがあつたといえる。両大戦間期の中国では、都市中間層の増加に伴つて事務職員たちの「職業病」に注意が促されるようになり、それは職業に就いた女性たちにとつて新たな悩みの種になつたといえる。

## (2) 結婚という選択肢の所在

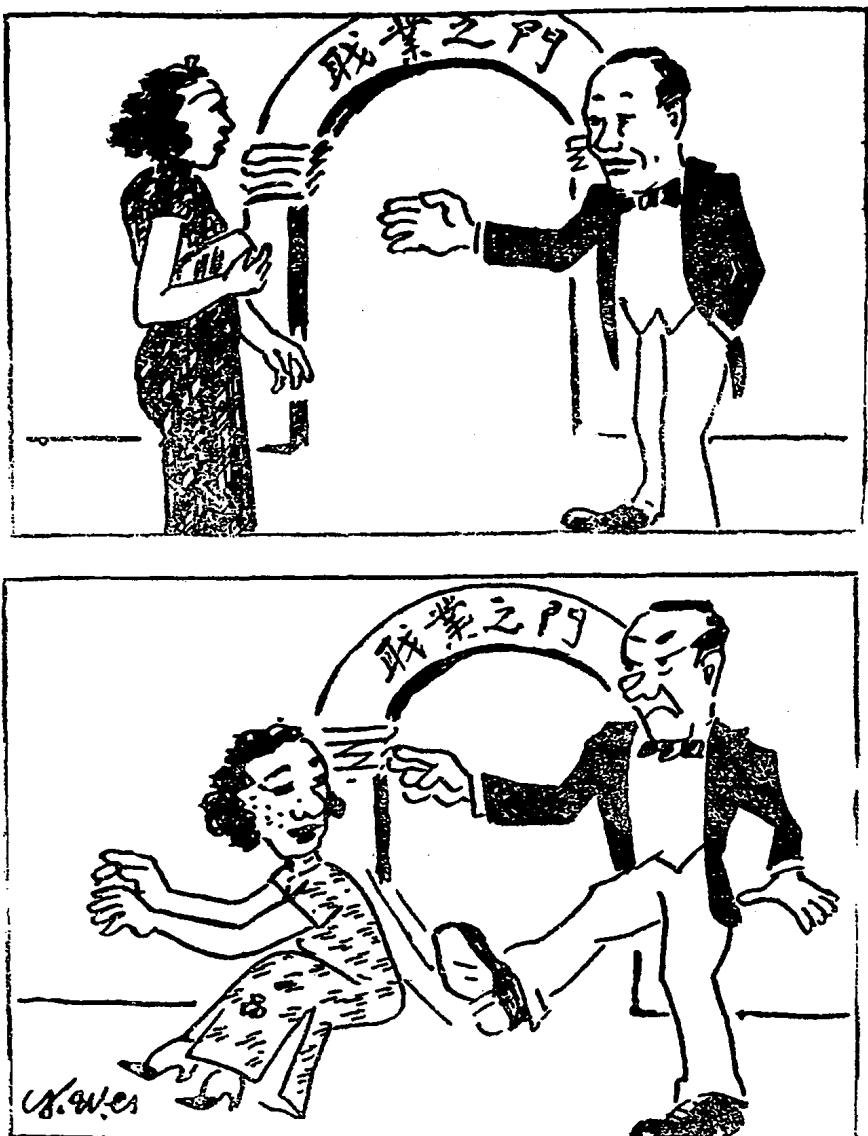
さて、日中全面戦争の勃発前夜の中国では、「中等学校の学生が四〇万人おり、毎年一〇万人あまりが卒業する。〔中略〕彼女・彼たちはこの六月に三叉路に立つ。一つの道は進学、一つの道は職探し、もう一つの道は家に戻ることである」という状況にあつた。<sup>(100)</sup> 中学校を卒業した女子学生には進学、就職、結婚という三つの選択肢が存在したが、それぞれの進路は男子学生とまったく異なる疑惑で選択された。さらに都市中間層の女性たちは、進路を模索するなかでさまざまな制約に直面して、ときには挫折し、その結果として「『女学生の『享楽主義』、<sup>(101)</sup> 職業婦人の『行き当たりばつたり』の態度、主婦の無気力」<sup>(102)</sup> が見られるようになつた。本稿では最後に、両大戦間期に人生の岐路にたつた中国都市の新中間層の女性たちが、進学・就職・結婚をどのように選んでいったのか見ていただきたい。

第一に、進学について見ると、両大戦間期の中国では高級中学以上の進学は狭き門であつた。例えば、「高級中学を受験した人の九割は合格できない。なぜなら各省にはほんのいくつかの高級中学があるに過ぎず、辺鄙で

遠い省では「一つだけ」であり、さらに「初級中学から高級中学に進学する者と高級中学から大学に進学する者の比率は僅かに一〇対二であり、多くの高級中学の卒業生は大学に入れない」といわれた。<sup>(103)</sup> そして中国では「表面上は男女の教育機会の均等に反対しないが、実際には女子は男子と同じように待遇しない」という傾向が見られた。<sup>(104)</sup> 世間では女子が進学するのは多くは嫁に行く資格を得るためにあるという、女子教育に対する低い認識がまかり通り、学校では女子学生の生活を徹底的に管理して個性の伸張を阻害しかねない環境をつくることが多く、<sup>(105)</sup> さらにたいていの家長は女子に大学以上の進学を望まなかつた。<sup>(106)</sup>

【図7】「才能を軽んじて容貌を重んじる」

出典：『婦女共鳴』第7巻第6号、1937年7月。



の女子学生の勉学の目的は、「一枚の学校卒業証書を手に入ればそれで終わりにすぎない。いうまでもなく、ある者は彼らの卒業証書や資格で結婚条件を引き上げる。これはまちがいなく、結婚を唯一の目的とする女性たちが、「進学を」比較的有效な手段の一つとしているのだろう<sup>(108)</sup>」とさえいわれた。

続いて第二に、就職について見てみよう。まず当時の学生たちには「畢業即失業」<sup>(109)</sup>といわれた恒常的な就職難が待ち受け、さらに女子学生の就職には、しばしば男子学生以上の過酷な条件を課せられ、例えば、能力よりも端麗な容姿が重視されることもあつた（【図7】参照）。それでも、当時の女子学生の多くは、「結婚前、学校での勉強が

一段落つくと、学校生活に慣れきつているので家にいても退屈か、あるいは何年か学校で学んだのに仕事に出ないと面白ないと考えて、社会に出て勤務する<sup>(11)</sup>ことを選んだ。しかし、注目すべきことに、就職は「彼女たちにしてみると一種の過渡的な方法にすぎない。どんな職業であれ三、五年やつて適當な夫を物色した後に結婚し、彼女ら自身の職業生活は終わりを告げる。『嫁漢、嫁漢、穿衣吃飯〔嫁げば衣食にありつける〕』とは粗野な俗語だが、一般の女子の微妙な心理を代弁している」といえる場合があった。

そして、就職した多くの都市中間層の女性たちにとつて、最大の関心事は結婚であり、例えば、独身の職業婦人のうち「上のものは家庭を組織する準備をしながら、昇進も忘れない。中のものは婚姻の問題だけを検討して、その他をおろそかにする。下のものは憐れで、狼狽しながらただ夫を探し求めるだけを考えていて、一日何をしていたかもわかつていよい。職業は生活の道筋にある一つの橋にすぎず、しばらく足を置くだけで、あとは話題にしない」とされた。このように、都市女性たちが家庭外就業を一時的なものと考え、卒業後に就職して職業婦人となつた女性の多くが数年後には退職して結婚し

主婦となつたのは、彼女たちが昇進機会を限定され、そのうえしばしば失業の危機にさらされる不安定な立場におかれていたからである。ただしそれにくわえて、両大戦間期においても結婚すると「夫が自らの誇りのために妻が勤務しないことを望む」という社会通念も影響していた。なぜならば、上・中流階層の夫は「十分にモダンな奥さまたちを社交場で見せびらかせば十分で、くわえて彼女らを自宅でうさ晴らしさせてやることもでき、それは自らの妻を労苦のある職業につかせるよりもずっとよい」と考えがちであった。そして、「奥さま方はもちろん、女性の職業に反対する主張が正しいとますます信じるようになる。彼女たちにしてみれば、あくせくと世事に奔走して一日中苦勞する女性の職業は、どうも苦しすぎるようである」という状況になつた。

それでは第三に、結婚について見てみよう。「今日の中国の知識人女性は、解放されたとはいいうものの、もつとも一般的な進路は主婦（「家庭婦女」）である」といわれたように、結婚はもっと多くの女子学生が選んだ進路であった。例えば、「彼女たちは学校で勉強する時期に、学ぶ目的をはつきりと認識していないので、いつたん学校を卒業すると人生の目的を解決するために今まで

学んだ全てのものを惜しげもなく犠牲にし、全ての生活の問題をまとめて男子の身に押しつけて、自らは何もしようとしない<sup>(116)</sup>」、あるいは「よく見かけることに、多くの能力のある女子が卒業するとすぐに嫁入りするが、それはただ生活が比較的裕福になるからであり、嫁入り後には家・屋敷を離れず、奴婢を大声で呼んで、摩登夫人ないしは楽天お嬢さまの生活を過ごしたいからにすぎない」といわれた。すなわち、学校を卒業した多くの都市女性たちは、生家よりも裕福な家に嫁ぐことで、上・中流階層に加わろうとしたといえる。しかし、女性たちの願望がすぐに実現されることは限られず、とりわけ上・中層の女性たちは、生家の家庭よりも理想に近い家庭に嫁ぐのが容易ではないために、ときには就職して長い間結婚せずに、両親の家庭で生活する者が現れたと考えられる。さらに、結婚生活には理想と現実の隔たりがあり、多くの都市中間層の女性たちは、たとえ結婚したとしても家事・育児の負担から逃れられないことが多かった。それゆえ、一九三四年に始まった「婦女回家」論争で「婦女回家」に反対する章乃器が奇しくも言及したように、「よく聞くことだが、中流階層の妻となつた人の多くが、独身で親の家にいるほうがいいという。下層

階級はいうまでもない」<sup>(118)</sup> という事態すら見られたのである。

そのため、五・四新文化運動直後の一九二〇年代初頭から、結婚せずに仕事を続ける職業婦人がよく見られた。当時、「中産階級」以上の出身で「近代新思潮」の影響を受けた自覚のある職業婦人の多くが独身主義者であるとされた<sup>(119)</sup>。この頃に独身主義が奨励されたのは、既婚女性は主婦として家事の責務を担うため未婚女性と比べると仕事に集中できないので、職業婦人が社会で仕事を続けるには独身であり続けたほうがよいという理由からであった。例えば、一九二四年五月の『婦女週報』は、「職業と結婚した」と公言する基伯孫女史（欧米人だが詳細不明）の新聞記事を紹介し、女史を賞賛している<sup>(120)</sup>。

一九三〇年代に入つても引き続き、「[仕事で]個人的な活路を見出そうとする女子たちは結婚すべきでない」<sup>(121)</sup>、あるいは「職業婦人についていえば、すでに職業があれば、精神が活発で体格も健全な時には皆と心を合わせて業務に尽力すべきで、未婚者は急いで結婚する必要はない、既婚者は産児制限をすべきである」という意見が根強く見られた。しかし他方で、一九二〇年代末から三〇

年代においては、職業婦人の独身主義に対する否定的な見方がじよじよに広まり、結婚せずに働く女性に代わって、就職して働いた後で辞職して結婚する女性や、結婚しても働き続ける女性が増え始めたと考えられる。例えば一九二八年一一月、ジャーナリストの鄒韜奮は、独身主義に批判的な見解を示し、「嫁ぐか嫁がないかは個人の自由だから、一人の女子が自発的に嫁がないのならば、第三者は反対する必要はない。しかし私が思うに、『嫁』は『常道なり』、『不嫁』は戒めとするに足りず、それゆえ私たちは『不嫁』主義も提唱したくはない」と論評した。さらにある論客は、一九三五年、独身主義の傾向は「女性運動の潮流が我国〔中国〕に入ってきたばかりの時」には顕著であったが、「第二代の人」はそれを学ぶ必要ないと断言している。<sup>(14)</sup>

そして一九三〇年代中頃までには、結婚と職業が両立できないと考えて職業を続けるために結婚せず、さらに既婚女性が職につくことに反対する女性が、オールドミス（「老処女」）と呼ばれるようになつた。<sup>(15)</sup>「老処女」は否定的ないしは同情的に論じられ、多くの独身の職業婦人が「老処女」と呼ばれることを畏れるようになり、こうして多くの職場で独身主義が否定されたのである。そ

れと同時に、独身主義をどのように克服すべきかについても論じられるようになった。独身主義の原因として挙げられたのは、女性たちが学校や職場などの狭い人間関係に閉じこもりがちで、配偶者にふさわしい男性に出会う機会がなかつたことであつた。例えば、当時の都市中間層の女性のうち「〔家の〕外で勤務しようとする者は、大部分が中・小学校の教員である。教育界以外で異なる職業を見つける者はきわめて少数で、しかも教えるのは多くが女子中・小学校に限られる。学生はもとより女で校長や同僚もみな女であり、女人国に閉じこもつて外部と往来せず狭い範囲に甘んじて自己満足していると、考えや学識が退化する危険があるばかりか、いわゆる男女の社交がなく、配偶者を選ぶ機会を完全に失う。「中略」大学で配偶者を得ることに失敗し、もう進学できない中・小学校の教員は、もしオールドミスで生涯を終えたくなければ職を移りかえるしかない。たしかに家長や友人の紹介によつて、運よくそれなりに満足できる人物に出会えるかもしれないが、多くの場合は、たいへんいい加減に四〇～五〇歳の人に嫁いで後妻となり、愛情の有無や相手の人柄も考慮できず、ただ生活のためだけに結婚する」。それゆえ、「未婚で夫やボーイフレンドのい

ない女子は、もし家の外で勤務すればオールドミスになり、さらに悪い結婚をする危険がある」と論じられた。<sup>(12)</sup>

ほかにも、独身主義が生じた原因としては、職業婦人が配偶者や結婚生活に対し抱く理想が高すぎることが挙げられた。職業婦人のなかには「ただ独身主義だけを心に抱いて、家庭を組織しようとはせず、もし嫁に出て一家を構えるのであれば、かならず高貴な紳士か富裕な商人を配偶者に選び、そのような場合にだけ職業を完全に放棄できる」とする者がいたという。すなわち、経済的に自立した独身女性の一部が、理想的な結婚を実現するためには独身主義が必要な時期もあると考えるようになつた。

以上のように、独身で親の家にいるほうが楽だと考える女性や、理想の結婚を実現するために独身でいる職業婦人が登場したことから、一九三〇年代中国の都市中間層の間では晩婚化が進展しつつあつたといえよう。そして、正確な統計がないので推察の域を出ないが、一九三〇年代の中国都市は、結婚資金をまかなえない低学歴・

低収入者ほど晩婚である傾向から、高学歴・高収入者ほど晩婚である傾向への移行期にさしかかっていたとも考えられる。

### おわりに

「中等社会」「中等階級」の女性に関する議論が、民国初年からしばしば見られるようになった。当時の都市中間層の女性とは、第一に、家事をきりもりする主婦（「家庭婦女」「家庭主婦」「家主婦」「主婦」）のことを指し、「上等階級」「資産階級」の「太太」「金持ちの奥さま」などと区別された。都市中間層の女性の大部を占めた主婦は、家事や育児によつて下男に近いほど労苦する女性から、「喫飯階級」「他者に食べさせてもらう階級」の女性まで、たいへん幅広いイメージで捉えられた。また第一に、都市中間層の女性は学校教員・企業職員・商店店員などのホワイトカラーの職につく職業婦人（「職業婦女」）をふくみ、次第に女性労働者（「労働婦女」）と明確に区別されることが多くなつた。

俸給生活者の夫と主婦の妻からなる家庭が、民国初期までに登場した。日用器具が未発達な状況のなかで高度化された家事と育児に一日中忙殺される主婦像が、五四新文化運動期には批判されたが、一九二〇年代後半からは、そうした勤勉な主婦が肯定的に論じされることが増えた。また両大戦間期には、夫の収入だけを頼りにし

ながらも使用人をやとい娯楽に興じる余裕のある「新主婦」もいたが、彼女たちの生活は「摩登」な「新家庭」

の「新文化生活」として憧れられた反面、夫に「寄生」して西洋文明をものまねしていると批判されもした。こうした論調の背景には、当時の国民党政権が主婦としての生き方を奨励したことや、企業・機関職員の夫と主婦の妻およびその子女からなる核家族の世帯が増加したことがあつたと考えられる。

さらに、民国初期から兩大戦間期の中・上層家庭の女性たちは、依然として就職に抵抗を感じ、とりわけ実業界で働くことへの抵抗感は強かつた。また上・中流家庭の夫たちは、妻を家庭外で働かせないで社交の場で活躍させることによって、自らの誇りを保とうとすることがあつた。しかし一九一〇年代後半から、中等教育を受けた後にホワイトカラーの職につく職業婦人がひろく認知されるようになつていった。教員や看護師のほかに、銀行・商店・外資系企業や、海關・郵政局、党や県・市などの機関に勤務する女性が現れた。政府各機関の女性職員採用は南京国民政府の成立当初をピークとし、その後は制限・削減されたが、学校や病院および民間の銀行や小売店が数多くの女性教員・職員・店員を雇用する傾向

は一九三〇年代も変わらなかつた。

こうして活躍の場をひろげた職業婦人たちのなかには、家計をなう男性職員や女性労働者たちと仕事に対する熱意や動機を異にする者がいた。学校を卒業して就職した女性にしても結婚が最大の関心事であり、就職は一時的なものと考える者が少なくなかつた。ただし、富裕な家に嫁いで優雅な奥さまとなる夢は実現できない場合も多く、都市中間層の女性のなかには長い期間独身で生家にいた方がよいと考える者もいた。そして一九二〇年代末には、職業人としての自覚や職業への情熱に欠ける女性職員に対する「花瓶」（職場の花）という蔑称が生まれたが、女性職員が「花瓶」のようになりがちであったのは、管理者が十分に能力を發揮できる機会を与えなかつたからでもあつた。

また五・四新文化運動期には、仕事を続けるために結婚しない独身主義の職業婦人が現れた。しかし、一九二〇年代末から三〇年代においては職業婦人の間で独身主義に対する否定的な見方がじよじよに広まっていき、結婚せずに働く女性に代わって、働いた後で辞職して結婚する女性や、結婚しても働き続ける女性が増え始めたと考えられる。そして一九三〇年代中頃までには、仕事を

続けるために結婚せず、既婚女性が職につく」とに反対する女性が、オールドミス（「老処女」）と呼ばれるようになつた。独身の職業婦人は「老処女」と呼ばれる」とを畏れるようになり、こうして多くの職場で独身主義が否定されたのである。ただし他方で、理想の結婚のためには独身主義が必要な時期もあるとする意見も見られ、両大戦間期の中国では都市中間層の形成に伴つて、一部で晩婚化の現象が見られるようになつていた。

## 註

- (1) 斎藤美奈子『モダンガール論』、文藝春秋、110011年、10頁。
- (2) 近代中国都市における新中間層形成については、拙稿「両大戦間期の上海における商業教育の展開と新中間層形成—国立上海商学院を中心にして」、『中国—社会と文化』第一八号、11003年六月、および同「民国期上海の新中間層」、東京大学大学院総合文化研究科博士学位論文、11005年を参照されたい。
- (3) 主婦に関しては、杉本史子「一九二〇年代中国における家事科教育—女性と家庭をめぐって」、『立命館史学』一二号、11000年10月、同「民国初期における女子家事科教育—その「近代」性と限界について」、『(立命館)言語文化研究』一二卷四号、11001年1月が興味深く、一九三〇年代末の都市中間層の家庭観・女性観は、久保桂子・在川由紀「民国期中国の家庭雑誌(III)—『快楽家庭』誌にみる家庭経営観」、『(戸板女子短期大學)研究年報』第三八号、一九九六年一月、また職業婦人に關しては、Ling-ling Lien, "Searching for the New Womanhood": Career Women in Shanghai, 1912-1945," Ph. D. dissertation, University of California, Irvine, 2001. に詳しい。ほかにも『婦女雑誌』を通した分析としては、周叙琪『一九一〇～110年代都會新婦女生活風貌—以《婦女雑誌》為分析実例』、国立台湾大学出版委員会、一九九六年、何瑋「一九一〇年代中国社会における「新婦女」(副題用の縦線を挿入)『婦女雑誌』を主なテキストとして」、富士ゼロックス小林節太郎記念基金110031年度研究助成論文(非売品)、11005年七月がある。本稿は以上の研究成果を踏まえて、主婦と職業婦人を関連づけながら都市中間層形成の問題を論じる。なお、中国都市女性の家庭と職業をめぐる学術的な論争については、拙稿「家庭・職業・革命—両大戦間期の中国における都市中間層の女性をめぐって」、村田雄一郎編『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版、11005年、四八～七一頁で整理した。
- (4) 織女前生「上海婦女生活之調査」、『婦女時報』第五号、一九二一年一月。
- (5) 李贊華「淺識薄技与中国婦女の經濟地位」、『婦女雑誌』一五卷一号、一九二九年一月。
- (6) 清末民国初期における「良妻賢母」主義の日本からの受容については、姚毅「中国における賢妻良母言説と女

性観の形成」、中国女性史研究会編『論集中国女性史』、吉川弘文館、一九九九年などの研究がある。

(7) 西川真子「民国初期家庭像をめぐる知識青年の言説」、『東洋史研究』第五九卷第11号、一〇〇〇年一一月。

(8) 徐新吾『中国近代織絲工業史』、上海人民出版社、一九九〇年、1116頁。

(9) Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" pp. 41-42.

(10) Wellington K. K. Chan, "Personal Styles, Cultural Values, and Management: The Sincere and Wing On Companies in Shanghai and Hong Kong, 1900-1941," in Kerrie L. MacPherson ed., *Asian Department Stores*, Curzon, Richmon, 1998, 「最野的女店員」、『上海之最』編委會『上海之最』、上海人民出版社、一九九〇年、11110頁。

(11) 江上幸子「近代中国の「新婦女」論説」「新女性」「玲」、フュリス女学院大学国際交流学部『共同研究報告アジア女性の社会的地位(1)』、フュリス女学院大学、一九九〇年。

(12) 「職業婦女」と「労働婦女」の用法について、Ling-ling Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" p. 32, 前掲江上幸子「近代中国の「新婦女」論説」「新女性」「玲」、『共同研究報告 アジア女性の社会的地位(1)』。

(13) 高希聖・郭真・高喬平・龔彬編『社会科学大辞典』、世界書局、一九二九年、七七六頁。

(14) 西記「活躍在商業上の女戦士」、『婦女生活』第一卷第一期、一九二五年八月の「百貨公同の女店員」。

主婦と職業婦人のあいだ—両大戦間期中国における都市中間層の形成

(15) 横「南京婦女之生活状況」、『婦女共鳴』第一卷第五六期、一九三一年七月一五日。

(16) 劉佩文「首都婦女の生活」、『婦女共鳴』第一卷第一期、一九三〇年八月一日。

(17) 「青島職業女子統計」、『婦女共鳴』第四五期、一九三一年四月一日。

(18) 范冬「婦女們在香港」、『女子月刊』第五号第一期、一九三七年一月。

(19) 王憲煦「女子對於職業應有之覺悟」、『婦女共鳴』第四一期、一九三一年一月十五日。

(20) 唐健萍「廈門市婦女職業調查」、『女子月刊』第四卷第七期、一九三六年七月。

(21) 須子「広州婦女の職業問題」、『女声』第一卷第一期、一九三三年三月一五日。

(22) 高君隱「中等社会之家計」、『中華婦女界』第一卷第二号、一九一五年一月。

(23) 近代中国における「賢母良妻」「良妻賢母」「賢妻良母」の用法については、瀬地山角・木原葉子「東アジアにおける良妻賢母主義—近代社会のプロジェクトとして」、『中国—社会と文化』第四号、一九八九年を参照されたい。

(24) 劉半農「南帰雜感」、『新青年』第五卷第一号、一九一八年八月。

(25) 前掲杉本史子「一九一〇年代中国における家事科教育—女性と家庭をめぐって」、『立命館史学』、游鑑明(大澤肇訳)「『婦女雑誌』から近代家政知識の構築を見る—食・衣・住を例として」、前掲村田雄二郎編『婦女雑

誌』からみる近代中国女性』、七二一—一〇三頁。

(26) 前掲西川真子「民国初期家庭像をめぐる知識青年の言説」、『東洋史研究』、池賢姫（陳姪漫訳）『婦女雑誌』からみる子どもの言説——日本植民地時代の朝鮮の女性雑誌『新女性』との比較から、前掲村田雄一郎編『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、三三七—三六四頁。

(27) 李贊華「浅識薄技与中國婦女の經濟地位」、『婦女雑誌』第一五卷第一号、一九二九年一月、劉恆「女子職業与職業女子」、『東方雑誌』第三三卷第一号、一九三六年一月など。

(28) 劉寶芬「上海的婦女」、『生活周刊』第二卷第五一号、一九二七年一〇月。

(29) 陸樾暉「上海婦女生活之分析」、『女光週刊』第一卷第一期、一九三〇年一月一日。

(30) 吕雲章『婦女問題論文集』、女子書店、一九三三年、四一—四六頁。

(31) 前山加奈子「林語堂と『婦女回家』論争」一九三〇年

代に於ける女性論」、『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』、汲古書院、一九九三年、五〇九—五二五頁。

(32) 織女前生「上海婦女生活之調查」、『婦女時報』第五号、一九二二年一月、劉寶芬「上海的婦女」、『生活周刊』第一卷第五一号、一九二七年一〇月、陸樾暉「上海婦女生活之分析」、『女光週刊』など。

(33) 友新「中國職業婦女の現状与經濟」、『婦女雑誌』第一三卷第二号、一九二七年二月。

(34) 劉王立明談、陳湘筆記「女子婚後の職業問題」、『教育与職業』第一五五期、一九三四年五月。

(35) 椒園「婦女職業与家庭問題」、『女青年月刊』第一四卷第五期、一九三五年五月。

(36) 劉寶芬「上海的婦女」、『生活周刊』第二卷第五一期、一九三〇年六月二九日。

(37) 湖英「女子之職業觀」、『女光週刊』第一卷第二六期、一九三〇年七月一〇月。

(38) 陳錫貞「婦女与經濟」、『女子月刊』第一卷第七期、一九三三年九月。

(39) 胡懷琛「女子職業問題」、『婦女雑誌』第六卷第一〇号、一九二〇年一〇月。

(40) 近代中国において中等教育以上を受けた女性の数は、一九一六年に〇・八万人、二九年に五・八万人、三二年に一〇・七万人に増加したという推計がある。前掲江上幸子「近代中国の『新婦女』言説と『新女性』丁玲」、『共同研究報告 アジア女性の社会的地位 (一)』。

(41) 陳華・雅露「婦女与職業」、『益友』第三卷第一〇期、一九四〇年九月一五日。

(42) 姜平「職業婦女在現段階的任務」、『上海婦女』第二卷第八期、一九三九年一月。

(43) 陸慶「破殼而出的女人們」、『中国社会』第一期、一九三四年一〇月。

(44) 叔章「女公務員訪問記」、『婦女生活』第八卷第一〇期、一九四〇年一月。

(45) 陳友琴「中國商業女子の現状」、『婦女雑誌』第一〇卷

第六号、一九三四年六月。

(46) Wellington K. K. Chan, "Personal Styles, Cultural Values, and Management," in Kerrie L. MacPherson ed.,

*Asian Department Stores.*

(47) 前掲陳友琴「中國商業女子的現狀」、『婦女雜誌』。

(48) 周曙山「提唱婦女職業之我見」、『婦女共鳴』第一卷第一期、一九三一年一一月一五日。

(49) 陳選善・鄭文漢「中學女生職業興趣調查報告」、『教育與職業』第一五一期、一九三四年一月。

(50) 『上海婦女志』編纂委員會編『上海婦女志』、社会科学院出版社、一九〇〇年、三八三頁。

(51) 上海の郵政局の女性職員数は二九人 (W. T. 「婦女職業与郵局限制女性職員」、『上海婦女』第三卷第九期、一九三九年一〇月二五日)、あるいは九〇人 (康果「郵政局女職員」、『婦女界』三三卷八期、一九四一年九月) などとする報告もある。

(52) 洪明「上海的職業婦女」、『職業生活』第一卷第五期、一九三九年一一月。

(53) 俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」、莊俞・賀聖鼎編『最近三十五年中国教育』、商務印書館、一九三五年、一八〇頁、中山義弘『近代中国における女性解放の思想と行動』、北九州中国書店、一九八三年、三五三頁。

(54) 金石音「請問拒用女職員者」、『婦女共鳴』第四四期、一九三一年二月一五日、前掲陸慶「破殼而出的女人們」、『中國社會』。

(55) 林暉「中央政府機關職員之統計的研究」、『統計月報』(56) 前掲洪明「上海的職業婦女」、『職業生活』。汪仲賢撰

第二卷第一〇期、音青「首都政府機關的女職員」、『生活周刊』第六卷第一一一期、一九三一年五月より重刊)。

(57) 前掲洪明「上海的職業婦女」、『職業生活』。

(58) 譚滿姣「婦女的職業人格」、『女子月刊』第五卷第六期、一九三七年六月。

(59) 楊崇皋口述 (陳桂芳筆記)「女子職業指導」、『婦女月報』第一卷第八期、一九三五年九月。

(60) 会雋「我對女職員的觀感」、『婦女旬刊』第七二期、一九四七年二月。

(61) 上海の紡績女工を研究したE・ホニグによると、工場の經營者が男性よりも女性の労働者を好んで採用する傾向は、ストライキが頻発した一九二〇年代に顕著となり、一九三〇年代初頭の不景気によつてさらに強まつた。女性の労働者が好しい理由としては、女性の方が男性よりも、視力がよく手先が器用なこと、忍耐強く争議を起しにくこと、賃金が安いこと、家計を担つていらない場合が多くレイオフしやすくなるなどが挙げられた。Emily Honig, Sisters and Strangers: Women in the Shanghai Cotton Mills, 1919-1949, Stanford University Press, Stanford [California], 1986, pp. 49-56.

(62) 金不聞「提唱婦女職業—将来提唱男子職業」、『申報』「自由談」、一九三一年一一月一五日。

(63) 雙木「找職業的女子們應有的認識」、『婦女旬刊』第一六卷第二〇号、一九三一年一〇月。

述・許曉霞繪圖『上海俗語圖說』、上海社會出版社、一九年五年、一八～一九、1111六～1111九頁。

(65) 前掲公雋「我對女職員的觀感」、『婦女旬刊』。

(66) 金仲華「從職業回到家庭嗎」、『婦女問題的各方面』、開明書店、一九三四年。

(67) Ling-ling Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" p. 32. エハの点を指摘してある。

(68) 杜君慧『婦女問題講話』、新知書店、一九三六年八月一四～111回頃。

(69) 前掲姜平「職業婦女在現段階的任務」、『上海婦女』。

(70) 「婦女團體調查」、『婦女雜誌』第九卷第六号、一九三一年六月。

(71) 「婦女職業促進委員會」、『婦女雜誌』第一一卷第五号、一九三五年五月。

(72) 「市会消息」、『女青年月刊』第七卷第一期、一九三八年一月、第七卷第二期、一九三八年一月。

(73) Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" pp. 259-291. 中共上海市委党史史料徵集委員會他編『上海店員和職員運動史、一九一九～一九四九年』、上海社會科學院出版社、一九九九年、五1111～五1117頁。

(74) 中国女性史研究会編『中国女性の100年—史料に見る歩み』、青木書店、1100四年、11111～11116頁（前山加奈子執筆）を参照した。

(75) 姜平「職業婦女在現段階的任務」、『上海婦女』第一卷第八期、一九三九年一月。

(76) 郵政局の既婚女性に対する措置とそれへの反対運動に

ついては、『上海婦女』等の記事を分析した Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" pp. 236-250. が詳しく述べる。

(77) 胡子嬰「為婦女爭取職業而呼號」、『婦女生活』第八卷第一二期、一九四〇年二月110日。

(78) Ling-ling Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" pp. 249.

(79) 前掲胡子嬰「為婦女爭取職業而呼號」、『婦女生活』。

(80) Ling-ling Lien, "Searching for the 'New Womanhood,'" pp. 197-201, 219-220.

(81) 爾十夷「女子職業」、『生活周刊』第一卷第1111期、一九三六年二月118日。

(82) 胡錫瑜「幸運兒」、『婦女雜誌』第一〇卷第六号、一九三四年一〇月。

(83) 陸費逵「女子職業難」、『婦女問題雜談』、中華書局、一九三〇年、三九～四二頁。

(84) 晏姑「中國職業婦女の三型」、『婦女雜誌』第一〇卷第六号、一九三四年六月。

(85) 友新「中國職業婦女の現狀与經濟」、『婦女雜誌』第一三卷第一一四号、一九三七年二月。

(86) 同前。

(87) 前掲晏姑「中國職業婦女の三型」、『婦女雜誌』。

(88) 前掲友新「中國職業婦女の現狀与經濟」、『婦女雜誌』。

(89) 前掲雙木「找職業的女子們應有的認識」、『婦女旬刊』。

(90) 前掲晏姑「中國職業婦女の三型」、『婦女雜誌』。

(91) 朱宋潤「婦女職業与家政」、『方舟月刊』第二八期、一

九三七年七月。

(92) 吳素因「二十三年之中國婦女問題」、『女子月刊』第二卷第一期、一九三四年一月。

(93) 管見の限りでも「花瓶」に論及したものは、殊君「向街頭的女性」、『女學生雜誌』創刊号、一九三一年一〇月、前掲雙木「找職業的女子們應有的認識」、『婦女旬刊』、李時山「適於現社會的三種婦女」、『婦女共鳴』第一卷第一期、一九三二年一一月、思濟「讀者論壇——為職業婦女進一言」、『女聲』第一卷第一五期、一九三三年五月、吳素因「二十三年之中國婦女問題」、『女子月刊』第二卷第一期、一九三四年一月、逸青「我們果真是花瓶嗎」、『女子月刊』第二卷第三号、一九三四年三月、少問「家庭婦女與職業婦女」、『女聲』第二卷第二〇·二一期、一九三四年八月、白石「女職員」、『新生週刊』第一卷第三三期、一九三四年九月、蕪園「女職員」、『女子月刊』第二卷第一号、一九三五年一月、張菊卿「女職員与花瓶」、『女子月刊』第三卷第四期、一九三五年四月、涵「把『花瓶』摔碎吧！」、『婦女月報』第一卷第五期、一九三五年六月、獄生「婦女解放與社會經濟」、『女青年月刊』第一四卷第七期、一九三五年七月、胡寶蟾「添招女職員的黑幕」、『婦女月報』第二卷第八期、一九三六年九月、朱幼華「怎樣做女職員」、『婦女月報』第二卷第一〇期、一九三六年一月、劍塵「我國婦女職業的檢討」、『婦女月報』第二卷第一二期、一九三六年一二月、品華「婦女職業談」、『婦女共鳴』第六卷第七期、一九三七年七月一〇日、劉英「婦女找職業、需要什麼資格」、『婦女界』二卷六期、一九

四〇年一月、笑東風「神聖的侍應生、神聖的婦女職業」、

『婦女界』二·一九四〇年四月、孟奴「供獻給職業婦女的一點意見和希望」、『上海女青年』第一卷第二期、一九四〇年四月、文「職業婦女與民主運動」、『婦女界』第四号、一九四〇年五月、曼麗「掙脫我們『花瓶』的銜頭」、『婦女界』第六號、一九四〇年六月、無幾「如此花瓶——為什麼要給人踩躡呢！」、『婦女界』第七號、一九四〇年七月、曼麗「序曲——為什麼要找職業」、『婦女界』第一二二號、一九四〇年一〇月など。Ling-ling Lien, "Searching for the New Womanhood," p. 64. にも言及がある。

(94) 叔章「女公務員訪問記」、『婦女生活』第八卷第一〇期、一九四〇年一月一〇日。

(95) 前掲会雋「我對女職員的觀感」、『婦女旬刊』。

(96) 蘇儀貞「婦女於職業時的衛生」、『婦女雜誌』第一二二卷第一〇号、一九二六年一〇月。

(97) 童國希「職業婦女的衛生」、『女青年月刊』第一三卷第二期、一九三四年一月。

(98) 楊彬如「職業婦女的運動」、『婦女雜誌』第一〇卷第六号、一九二四年六月。

(99) 前掲高希聖他編『社會科學大詞典』(一九二九年)、七七六頁は、「職業病」を「特殊な職業・労働によつて引き起こされる病氣」と定義している。

(100) 姚名達「中等學校畢業女生的前進路線」、『女子月刊』第五卷第六期、一九三七年六月。

(101) とくに女子の初等・中等教育が發展した上海では、戰前期に五〇校以上の女子中學校が設立され、一九三五年

- の時点で計九五九九人の女子中学生がおり、それは全中学生数の二九・八%を占めた。前掲『上海婦女志』編纂委員会編『上海婦女志』、四五三、四六三頁。
- (102) 金石音「嗚呼婦女之發展!」、『婦女共鳴』第五三期、一九三一年八月。
- (103) 前掲姚名達「中等学校畢業女生的前進路線」、『女子月刊』。
- (104) 申惠文「論女子教育与職業」、『教育与職業』第一九六期、一九四一年一二月。
- (105) 小林善文『中国近代教育の普及と改革に関する研究』、汲古書院、一〇〇二年、一三四、一三五頁。
- (106) 清媛「畢業後出路的檢討」、『方舟月刊』第二七期、一九三六年八月。
- (107) 椒園「婦女職業与家庭問題」、『女青年月刊』第一四卷第五期、一九三五年五月。
- (108) 陳健夫「婦女應該經濟獨立嗎」、『方舟月刊』第三四期、一九三七年三月。
- (109) 前掲清媛「畢業後出路的檢討」、『方舟月刊』。
- (110) 王叔銘「婦女職業与婚姻」、『女子月刊』第五卷第三期、一九三七年三月。
- (111) 单倫理「結婚女子的職業問題」、『女青年月刊』第一三卷第二期、一九三四年一月。
- (112) 前掲陸慶「破殼而出的女人們」、『中国社會』。
- (113) 前掲王叔銘「婦女職業与婚姻」、『女子月刊』。
- (114) 椒園「婦女職業与家庭問題」、『女青年月刊』第一四卷第五号、一九三五年五月。
- (115) 前掲陸慶「破殼而出的女人們」、『中国社會』。
- (116) 李贊華「淺識薄技与中國婦女的經濟地位」、『婦女雜誌』第一五卷第一号、一九二九年一月。
- (117) 「從職業說到救亡」、『婦女生活』第四卷第一号、一九三七年一月。
- (118) 章乃器「婦女底出路」、『女声』第二卷第二三号、一九三四年九月一〇日。
- (119) 前掲晏姑「中國職業婦女的三型」、『婦女雜誌』。中国女性史研究會編『中国女性の一〇〇年——史料にみる歩み』青木書店、一〇〇四年、一三三、一三六頁、前山加奈子執筆。
- (120) 前掲季鷹「就職業呢？還是結婚呢？」、『婦女週報』第一九期、一九二四年五月二一日。
- (121) 蔡悟「婚後婦女の職業問題」、『婦女共鳴』第二卷第四期、一九三三年四月。
- (122) 唯「職業与生育」、『方舟月刊』第二九期、一九三六年一〇月。
- (123) 「一位不嫁的女書記官」、『生活周刊』第四卷第二期、一九二八年一一月二十五日。
- (124) 茵玲「婦女在什麼時期中適於對外工作」、『女青年月刊』第一四卷第八期、一九三五年一〇月。
- (125) 蔡希真「婦女職業与婚姻」、『女青年月刊』第一三卷第二期、一九三四年一月。
- (126) 萍「男職員眼中的職業婦女」、『婦女界』第二卷第一期、一九四〇年一月。
- (127) 逆流「女子社會服務的時期問題」、『女青年月刊』第一

四卷第八期、一九三五年一〇月。

(128) 我夫「家庭婦女的副業問題」、『女青年月刊』第一三卷

第二期、一九三四年一月。

主婦と職業婦人のあいだ——兩大戦間期中国における都市中間層の形成